

Flesh-versus-Soul Discourse in *Jane Eyre*

Manami Tamura

Charlotte Brontë's *Jane Eyre* is considered to have a story framework based on the pilgrimage of a heroine and, as a result, the dualistic discourse on flesh/body versus soul/spirit can frequently be found. In a narrative of pilgrimage, human life is illustrated as a battle of soul against flesh. Similarly in *Jane Eyre*, 'soul'/'spirit' is superior to 'flesh'/'body' and the frailty of flesh is represented mostly as something to be conquered. However, the heroine seems to have a slightly different attitude towards this 'orthodox' notion, which is hinted at in two different scenes where the heroine shocks clergymen by her 'unorthodox' utterances. This paper examines both the 'orthodox' and 'unorthodox' discourses related to the flesh/body versus soul/spirit dualism, and discusses what induces Jane to make her unorthodox utterances.

『ジェイン・エア』における肉体と魂をめぐる言説

田村 真奈美

Charlotte Brontëの*Jane Eyre* (1847)には「身体 (body)／肉体 (flesh)」と「精神 (spirit)／魂 (soul)」を対照する言説が頻繁に見られる。特にBrocklehurst, Helen Burns, St. John Riversなど聖職者、または聖職者でなくともジェインに神の国の存在を教える人物が、肉体と魂を対照する発言をすることが多いのだが、ジェインやRochesterにもこのような発言がしばしば見られる。この小説は女主人公ジェイン・エアの自伝という設定になっており、語り手ジェインは自らの生涯を振り返って、その人生の道程を読者に示している。その際に*The Pilgrim's Progress* (1678, 84)のような巡礼物語の枠組みを利用している¹⁾ことが、この作品において肉体と魂をめぐる言説が頻繁に見られることに関係していよう。ジェインの人生の物語は、いわば彼女が良きクリスチャンへと成長する物語であり、誘惑を退け、神に奉仕する道を探す物語なのである。作中でセント・ジョンも引用した新約聖書のマタイによる福音書の言葉、‘Watch and pray, that ye enter not into temptation: the spirit indeed is willing, but the flesh is weak.’ [Matthew, 26: 41]²⁾に端的に表れているように、神への奉仕を志向する「精神」が、誘惑に陥りやすい、弱い「肉」をいかに克服するか、ということが巡礼の物語の骨子であり、『ジェイン・エア』が巡礼の物語ならば、そこに肉体と魂を対照する言説が多く見られるのも不思議ではないだろう³⁾。本稿では、この肉体と魂をめぐる言説を中心に『ジェイン・エア』を読み直してゆくが、特にジェインの発言がときに精神レベルと身体レベルを逆転させてしまう点に着目して、それが何を指し示しているのかを考えてみたい。

まず第1巻第4章における10歳の少女ジェインとブロックルハーストとのやりとりを見てみよう。伯母のMrs. Reedの家で、Lowood校の校長で聖職者のブロックルハーストと初めて対面したジェインは、“Do you know where the wicked go after death?”と尋ねられ、“They go to hell.”と‘orthodox’に答える。ところが、続いて“What must you do to avoid it?”と聞かれると、彼女はオーソドクスではない答えを返してしまう。ジェインの口から出た答えは“I must

keep in good health, and not die.” (34)⁴⁾ というものだった。もちろん期待されていた答えは「良い子になるようにします」というような精神的なものだったはずなのだが、ジェインの答えは全く身体レベルのものだったのである。このようにアンオーソドクスな応答をしてしまったジェインは、この後ローウッド校へ送られ、クリスチャンとしての教育を受けることになる。

ブロックルハーストは自らの教育方針を “to mortify in these girls *the lusts of the flesh*” (74, italics mine) と説明しているが、それは生徒たちに粗末な身なりをさせ、成長期の身体には到底足りないほど少量の食事しか与えない、という極端なものだった。彼は、劣悪な食事の埋め合わせに別の食事（パンとチーズだけなのだが）を振舞った Miss Temple を、“you may indeed feed their *vile bodies*, but you little think how you starve their *immortal souls!*” (72, italics mine) と非難している。しかし、彼の実際の行動がどうであれ、発言だけをとりあげてみれば、そこに表れている卑しい肉体と崇高な魂という対照は、キリスト教の伝統においてはオーソドクスといえるだろう。

ところでローウッド校でのクリスチャンとしてのジェインの成長にとって重要だったのは、このブロックルハーストの教育方針などではなく、親友ヘレン・バーンズの宗教観に触れたことと、良きクリスチャンの女性としてのロール・モデルであったミス・テンプレルの存在だった。ジェインはヘレンの聡明さと寛大さを尊敬するが、現世での幸福をまったく諦めて、神の国へ迎え入れられる時としての「死」を待ち望んでいるかのようなヘレンの発言は、ジェインを悲しい気持ちにさせる。

“We are and must be, one and all, burdened with faults in this world: but the time will soon come when, I trust, we shall put them off in putting off our *corruptible bodies*; when debasement and sin will fall from us with *this cumbrous frame of flesh*, and only *the spark of the spirit* will remain, —the impalpable principle of life and thought, pure as when it left the Creator to inspire the creature: whence it came it will return; perhaps again to be communicated to some being higher than man—perhaps to pass through gradations of glory, from the pale human soul to brighten to the seraph!” (66-7, italics mine)

また別のところでは “God waits only *the separation of spirit from flesh* to crown us with a full reward” (81, italics mine) とも言っているが、ヘレンにとって肉体は魂を捕えている牢獄であり、「死」はその牢獄からの魂の解放なのである。この一連の発言もまたオーソドクスなものだが、ジェインにはヘレンの説く神の国の存在がどうも信じられない。死の床に横たわるヘレンのもとに駆けつけたジェインは、こう尋ねる。“Where is God? What is God?” “You are sure, then, Helen, that there is such a place as heaven; and that our souls can get to it when we die?” ヘレンの返事を聞いても納得できないジェインはなお自問する。

Again I questioned; but this time only in thought. "Where is that region? Does it exist?" And I clasped my arms closer round Helen: she seemed dearer to me than ever; I felt as if I could not let her go; I lay with my face hidden on her neck." (96-7)

ジェインはヘレンと同じように考えることはできず、あたかもヘレンをこの世につなぎとめようとするかのようにその身体をしっかりと抱き締めている。ヘレンの言葉は、信仰についてジェインに深く考えさせるが、結局ジェインはヘレンの来世志向を共有することはできなかった。

しかし、ヘレンの死後もローウッド校で生徒として、後には教師として計8年間過ごしたジェインは、ミス・テンプルの例に倣い、自制と自律を身につけた立派なクリスチャンとなる。そして新たな奉仕先として向かったThornfieldでは、あやうくロチェスターの重婚の企みに巻き込まれそうになるが、結局は誘惑を遠ざけ、彼のもとを去る。ジェインは不信心なロチェスターを折りに触れては戒め、彼のもとを去るときには "Do as I do: trust in God and yourself. Believe in heaven. Hope to meet again there." (403)⁵⁾ と言っている。かつて神の国の存在が信じられなかった少女が、この時点では他人に神の国の存在を説くようになっていたのである。

ソーンフィールドを飛び出したジェインは、荒野をさまよった後Marshendに迎え入れられる。ここでジェインは、インドへ宣教の旅に出ようとしている牧師のセント・ジョン・リヴァーズに、宣教師の妻にふさわしいと見込まれる。しかし、セント・ジョンに決断を迫られたとき、ジェインは再びアンオーソドクスな発言で聖職者を驚かせてしまうことになる。セント・ジョンとは結婚できないと言うジェインは、彼に理由を問われてこう答える。

"Formerly I answered, because you did not love me; now I reply, because you almost hate me. If I were to marry you, you would kill me. You are killing me now." (526)

この答にセント・ジョンは衝撃を受ける。"*I should kill you—I am killing you?* Your words are such as ought not to be used: violent, unfeminine, and untrue." 彼がショックを受けるのも無理はない。'hate', 'kill' というのは最もクリスチャンらしからぬこととされているのだから。ただしここでジェインが言っているのは、もちろん文字どおり殺されるということではなく、精神的な自由をまったく奪われること、精神的にほとんど死んだような状態に追い込まれることである。ジェインはセント・ジョンの圧倒的な影響力の前ではほとんど逆らうこともできず、大人しく服従するだけになってしまうので、そのことを 'you are killing me' と表現したわけだが、'kill' という言葉が身体的イメージを強く喚起するために、セント・ジョンを驚かせてしまったのである。この場合もまた、精神レベルのことを身体レベルで表現したことが問題だったといえよう。このように、宣教師の妻にふさわしいと見込まれるほど立派なクリスチャンとなったはずのジェインも、肉体と魂をめぐってはオーソドクスではない発言をしてしまうのである。

またセント・ジョンは、"Don't cling so tenaciously to ties of the flesh" (499) とジェインをたしなめているが、彼の言う「肉のつながり ('ties of the flesh')」とは他の人間に対する情緒的

なつながり、つまり他の人間に対する愛情のことであり、それは彼が別のところでは、“human affections and sympathies have a most powerful hold on you” (454) と言っていることから明らかである。そして彼は、「肉のつながり」は弱い者が求めるもので、ジェインはもっと高いところ、天を見なければならぬ、と言うのである。

ジェインが人間の愛情に強い執着を持っていたのは子どもの頃からだった。ヘレン・バーンズにも、“you think too much of the love of human beings” (81) とたしなめられている。しかし、ジェインのこの傾向は最後まで変わることはない。第2巻第7章で、リード伯母の臨終に立ち会うためにソーンフィールドを留守にしていたジェインは、一月ぶりに屋敷に戻り、屋敷の人々に歓迎されるが、このとき語り手はこう言っている。“...there is no happiness like that of being loved by your fellow-creatures, and feeling that your presence is an addition to their comfort.” (308) 自分の過去の物語を語っている語り手のジェインが現在形でこう述べているのだから、この点についてのジェインの態度や考え方は、誰にとがめられようと結局変わらなかったわけである。

ジェインがセント・ジョンの申し出を断り、結局ロチェスターのもとへ戻ったことも、この他の人間に対する愛情へのこだわりがあると考えられる。ジェインがセント・ジョンを拒んだとき、それは宣教のためにインドへ行くことを拒んだというよりも、彼の妻としていくことを拒んだのだった。“I freely consent to go with you as your fellow-missionary; but not as your wife: I cannot marry you and become a part of you.” (521) セント・ジョンにとってジェインとの結婚は神への奉仕のための手段にすぎない。既に述べたように、彼にとって「肉のつながり」つまり他の人間に対する愛情は、弱い者が求めるものに過ぎないのだから、彼がジェインに対してそのような愛情を持つことはない。一方のジェインは人間の愛情に強く執着しており、愛のない結婚はできないと考えている。ジェインは、そもそもセント・ジョンのクリスチャンとしての行動には「愛」が欠けているのではないかと疑っているようだ。彼はたとえどんな悪天候の日でも、教区の貧しい人々や病人のもとを訪れるのを欠かしたことはなかったが、語り手はそのような彼の仕事ぶりを、‘his mission of love, or duty—I scarcely know in which light he regarded it’ (448) と皮肉めいた調子で解説している。

ジェインがロチェスターのもとへ戻ったことは、もう少し微妙な問題である。セント・ジョンはジェインのロチェスターへの断ち切れぬ思いを「誘惑 (temptation)」と呼んでおり、インドへ宣教の旅に出るかわりにロチェスターの消息を尋ねに行くというのは、「肉の欲 (lusts of the flesh)」に負けたと見られかねない⁶⁾。そう見られないように、『ジェイン・エア』のテキストにはいくつかの工夫がなされている。まず、ジェインがロチェスターの呼び声を聞いたときの衝撃を、新約聖書の使徒行伝における、パウロとシラスが捕えられていた牢獄の扉を開けた大地震に例えている。まるで神の啓示を受けた、とでも言うように。彼女はこの声を聞くまではロチェスターの消息を尋ねる手紙を何度か出したただけだったのだが、この「啓示」を受けると、自らソーンフィールドを訪れることにするのである。さらに探し当てたロチェスターは家屋敷を失い、身

体が不自由になっていた。誰かの助けを借りなければ、一人では暮らしていけない状態になっていたのである。再会したロチェスターにジェインは言う。

“I will be your neighbour, your nurse, your housekeeper. I find you lonely: I will be your companion—to read to you, to walk with you, to sit with you, to wait on you, to be eyes and hands to you. Cease to look so melancholy, my dear Master; you shall not be left desolate, so long as I live.” (556)

彼女の愛情は、病人を慰め、その世話をするというクリスチャンらしい発露を見出したのである。そのうえこの時点でのロチェスターは、ジェインとの重婚を企て神に挑もうとしたかつての彼とは、もはや異なっていることが強調されている。今では悔い改め、神に祈りを捧げるようになった、とロチェスター自身がジェインに語る。ジェインはソーンフィールドでロチェスターの誘惑を退けたことで自らのクリスチャンとしてのモラルを守ったが、それは同時にロチェスターを再び信仰に目覚めさせることにつながった。ジェインを失い、さらに屋敷の火事という惨事に見舞われ、視力と片腕を失ってようやく、ロチェスターは神の力を思い知ることになったのである。そして悔い改めた彼のもとにジェインが戻ってきたとき、彼は“my heart swells with gratitude to the beneficent God of this earth just now” (571) と言う。こうしてみると、ジェインはクリスチャンとしてロチェスターに対して良い影響を与えたことになる。ヴィクトリア朝の英国では、女性はモラルの点で男性よりすぐれていて、男性に良い影響を及ぼすことが妻や母の務めであるとして、‘women’s moral power’, ‘female influence’ ということが盛んに主張されていた。たとえば、Sarah Lewisの *Woman’s Mission* (1839) や Mrs. Ellisの *The Woman of England* (1839) など、1830年代から40年代にかけて広く読まれた女性向けの手引書 (conduct books) は、女性の領分は家庭であり、神から与えられた女性の使命 (mission) あるいは義務 (duty) は夫や子どもにも道徳的に良い影響を与えること、と説いている。ジェインが英国にとどまり、身体の不自由なロチェスターを支え、慰め、道徳的に良い影響を与える、という結末は、当時の社会には受け入れやすいものだったはずである。ジェインはロチェスターに “I love you better now, when I can really be useful to you” (570) とも言っている。この発言のなかの ‘useful’ という言葉も当時のキーワードで、『ジェイン・エア』にも繰り返し出てくるが、良きクリスチャンとしての女性は useful であるよう務めるべきだった。ジェインの決断は、誘惑に負けてのものではなく、良きクリスチャンとしてのものだったはずなのである。

ところが、当時の批評家の中には『ジェイン・エア』をクリスチャンらしくない小説と非難した者もいた。たとえば1848年1月の *Christian Remembrancer* の匿名の批評は、『ジェイン・エア』を ‘unfeminine’ とし、‘All virtue is but well masked vice, all religious profession and conduct is but the whitening of the sepulchre, all self-denial is but deeper selfishness.’⁷⁾ と評している。また、1848年12月の *Quarterly Review* に載った Elizabeth Rigby の『ジェイン・エア』評はもっと厳しく、『ジェイン・エア』を ‘anti-Christian composition’ とまで言い、こう続ける。

‘It is true Jane does right, and exerts great moral strength, but it is the strength of a mere heathen mind which is a law unto itself. No Christian grace is perceptible upon her.’⁸⁾

このように言われたことは作者にとっては心外だったであろう。しかし、これら批評家は『ジェイン・エア』にオーソドクスでないものを感じ取っていたのである。

『ジェイン・エア』を、ジェインが立派なクリスチャンになる物語として読んだ場合に問題となるのは、他の人間の愛情、つまり現世の愛に対するジェインの強い執着ではないだろうか。それが、ジェインにはヘレン・バーンズのような天上性が感じられない、逆に生々しさが感じられる理由なのだと思う。これはロチェスターにも言えることである。悔い改めたロチェスターは、神のもとへ召されてそこでジェインに再会できることを祈るのだが、その直後にやはり生きているジェイン、魂と肉体の両方を持ったジェインに会いたい、と願っている。“Oh, I longed for thee *both with soul and flesh!*” (571-2, italics mine) このロチェスターの態度もセント・ジョンならば「肉のつながり」への執着と呼ぶことだろう。さらに先に引用した部分でも、ロチェスターは ‘the beneficent God of *this earth*’ (italics mine) と言っていた点に注意したい。

『ジェイン・エア』における肉体と魂をめぐるアンオーソドクスな言説はいったい何を指し示しているのか。ジェインが精神的なことを身体レベルの表現で言い表してしまうことは、彼女の「肉のつながり」への強い執着と関係があるのではないだろうか。「精神／魂」をより尊いものとし、「身体／肉体」を軽んじるオーソドクスな言説が、たとえばヘレン・バーンズやセント・ジョンに見られるように、死後の永遠の魂を希求するあまり現世の生を軽んじる傾向を表すものだとすれば、ジェインやロチェスターに見られるアンオーソドクスな発言は、「身体／肉体」をもって生きる現世の生も大切にしたいという欲求の現れではないかと思われるのである。そしてこの現世の生への執着が、現世での愛、同朋愛へのこだわりにつながっている。現世での、過ちを犯しがちな人間に対する愛情が、ジェインの場合強すぎると、オーソドクスなヘレン・バーンズやセント・ジョン・リヴァーズは考えた。一方、セント・ジョンのクリスチャンとしての行動には愛が欠けている、とジェインは考えていた。セント・ジョンの仕事ぶりを ‘mission of love, or duty’ といふかしみ、神への愛のみならず神の創造物たる同朋 (fellow creatures) への愛／同朋からの愛にも強くこだわったジェインは、クリスチャンとしての自分の使命を mission of love *and* duty と考えていたのではないか。ジェインが精神レベルと身体レベルを逆転させた発言で聖職者を驚かせるとき、それは mission of love and duty を実践しようとする彼女の、duty に偏りがちな聖職者たちへの揺さぶりとも感じられるのである。

* 本稿は2004年日本ブロンテ協会公開講座（2004年6月5日、於名古屋女子大学）における講演の原稿を大幅に修正し、加筆したものである。

註

- 1) Cf. Dale 208–224, Qualls 1–16, 43–84. 白井 127.
- 2) ジェインがロチェスターの不思議な呼び声を聞き、セント・ジョンの呪縛から放たれた翌日、セント・ジョンはジェインに置き手紙を残す（第3巻第10章）。その手紙にこの言葉が引用されている。“I shall expect your clear decision when I return this day fortnight. Meantime, watch and pray that you enter not into temptation: the spirit, I trust, is willing, but the flesh, I see, is weak. I shall pray for you hourly.” (538)
- 3) 旧約聖書においては肉体と魂は切り離して考えられるものではなく、人間はその両面から全体として捉えられている。また、死後、魂が肉体を抜け出して神のもとへ行くという思想は（少なくとも後期の書までは）ない。しかし新約聖書になると、肉体と魂は切り離され、人間の生は「肉と霊の闘い」とも見られるようになる（ボウカー、63、178–9、409）。
- 4) Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Oxford: Clarendon Press, 1969). 以後、本書からの引用は頁数を括弧内に示す。
- 5) Quallsはこのジェインの発言を取り上げて、“trust in God”のあとに“and yourself”とあるところがきわめてヴィクトリア朝的で、バニヤンの時代との相違を感じさせると、次のように指摘している。“The reality of the insight and the signal of what Brontë is doing are validated in one phrase: “trust in God *and yourself*.” This “and yourself” is the superbly Victorian addition, the phrase that takes us two centuries from Bunyan: there, in that self, is the real knowable center of the godborn.” (Qualls 61)
- 6) 上記註2) 参照。
- 7) Norton版 *Jane Eyre* 450.
- 8) Ibid. 452.

参考文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Oxford: Clarendon Press, 1969.
———. *Jane Eyre*. 3rd Edition. New York: Norton, 2001.
- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress*. 1678, 1684. Harmondsworth: Penguin, 1987.
- Dale, Peter Allan. ‘Charlotte Brontë’s “Tale Half-Told”: The Disruption of Narrative Structure in *Jane Eyre*.’ *Modern Language Quarterly* 47 (1986): 108–129. Rpt. in *Jane Eyre*. Ed. Heather Glen. New Casebooks. London: Macmillan, 1997. 205–226.
- Ellis, Sarah Stickney. *The Women of England, Their Social Duties, and Domestic Habits*. London: Fisher, Son, & Co., 1839.
- Helsing, Elizabeth K., Robin Lauterbach Sheets, and William Veeder. *The Woman Question: Defining Voices, 1837–1883*. New York: Garland Publishing, Inc., 1983. Vol. 1 of *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837–1883*. 3 vols.
- The Holy Bible, King James Version*. New York: Meridian, 1974.
- Qualls, Barry V. *The Secular Pilgrims of Victorian Fiction: The Novel as Book of Life*. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- Thormählen, Marianne. *The Brontës and Religion*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- 池上良正, 小田淑子, 島藺進, 末木文美土, 関一敏, 鶴岡賀雄編『言語と身体——聖なるものの場と媒体』

『ジェイン・エア』における肉体と魂をめぐる言説

岩波講座宗教5 岩波書店, 2004.

市川千恵子「『レディー』としての戦略——『ジェイン・エア』とコンダクト・ブック」『英文學研究』第79巻第2号, 2002.

川本静子「清く正しく美しく——手引書の中の〈家庭の天使〉像」松村昌家, 川本静子, 長島伸一, 村岡健次編『女王陛下の時代』英国文化の世紀3 研究社出版, 1996.

白井義昭『シャーロット・ブロンテの世界——父権制からの脱却』彩流社, 1992.

『聖書 (新共同訳)』日本聖書協会, 2001.

ジョン・ボウカー編著, 荒井献, 池田裕, 井谷嘉男監訳『聖書百科全書』三省堂, 2000.